

「笑う警官」 ★★★

2010（平成22）年1月17日鑑賞<ホクテンザ1>

監督・製作・脚本：角川春樹
原作：佐々木譲『笑う警官』（ハルキ文庫刊）
佐伯宏一（北海道警大通署・警部補）／大森南朋
小島百合（北海道警大通署・警官）／松雪泰子
津久井卓（北海道警大通署・巡査）／宮迫博之
新宮昌樹（佐伯を慕う新人刑事）／忍成修吾
植村辰男（佐伯を支えるベテラン刑事）／螢雪次朗
町田光芳（北海道警大通署・刑事）／野村祐人
岩井隆（北海道警大通署・刑事）／伊藤明賢
安田（バー“BLACK BIRD”のマスター）／大友康平
浅野貴彦（北海道警本部・生活安全部長）／矢島健一
石岡正純（北海道警本部・刑事部長）／鹿賀丈史
水村朝美（元“ミス道警”）／乙黒えり
2009年・日本映画・122分
配給／東映

<なぜ現場に本部が介入？>

本作は、ある殺人事件の現場に急行した北海道警察大通署の町田光芳刑事（野村祐人）と岩井隆刑事（伊藤明賢）が、被害者の女性が“ミス道警”の水村朝美（乙黒えり）だとわかりビックリするところからスタートする。被害者にかけられていた手錠は警察のもの、そして被害者が警察官となれば、こりゃ大変な事件。さっそくマニュアルどおりのアクションを起こそうとした2人だが、そこになぜか北海道警察本部の刑事が割って入り、「この事件は本部で扱うから大通署は引っ込んで」と言われたから、町田と岩井がカチンときたのは当然だ。

俺たちが一番最初に現場に駆けつけたのだから、被害者の身元を確認したのは俺たちが一番最初のはず。しかるに、その現場になぜ本部が介入するの？こりゃ何かウラがある。町田と岩井がそう睨んだのは当然だが、警察組織の末端のコマにすぎない彼らに一体何ができるのだろうか？この最初の問題提起は面白い。

<真犯人は誰だ！>

本部のやり方に憤懣やる方ない2人と共に、独自のウラ「捜査」を開始しリードしたのは同じ大通署の佐伯宏一（大森南朋）。他方、本作の華として、またストーリー形成上の「知恵袋」としての役割を果たすのが、大通署の女性警官小島百合（松雪泰子）。小島が新人刑事の新宮昌樹（忍成修吾）とともにバー“BLACK BIRD”に入ると、そこにはなぜか佐伯を中心とし町田や岩井さらにはベテラン刑事の植村辰男（螢雪次朗）らが勢ぞろい。そしてそこに登場したのが、何と水村朝美殺しの犯人として北海道警本部が指名手配し、射殺命令まで出ている津久井卓巡査（宮迫博之）だ。佐伯らが睨むとおり、津久井が犯人でないとすれば、水村朝美殺しの真犯人は一体誰？

ここから佐伯を中心とする水村朝美殺しの真犯人捜しが始まるが、「百条委」が開かれる前に、そして津久井が射殺される前に真犯人を捜し出すことができるのだろうか？

<テーマは面白いが・・・>

本作は北海道警察が組織ぐるみでやっていたという「裏金づくり」をテーマとした佐々木譲原作の問題提起作を映画化したものだが、実際に北海道警にそんな疑惑が浮上したのは2002年のことらしい。裏金づくりとはいかにもセコイ地方公務員のやりそうなことだが、大阪市では裏金づくりは日常茶飯事化してる（？）ため、本作の主人公佐伯が告発するように、北海道警が3年間で14億の裏金づくりをやっていたとしても、私にはそれほど驚くことではない。

本作のポイントは、裏金づくりを調査するために開催される「百条委員会」に津久井が出頭することを知った北海道警本部の刑事部長石岡正純（鹿賀丈史）がさまざまな策を弄して津久井を元“ミス道警”水村朝美の殺人犯に仕立てあげたうえ、その逮捕ではなく射殺命令を出すというところ。角川春樹が「動員が150万人を超えなかったら映画を辞める」とまで自信をもって監督・製作・脚本で挑んだ本作だが、法治国家の日本ではいくら何でもそりゃ設定が飛びすぎでは？

さらに、日本にもSITという特殊犯捜査係があるらしいが、それを総動員して「百条委員会」に出頭しようとする津久井の射殺体制を取るという設定は日本ではありえない話。したがって、テーマは社会的だし、ストーリー構成もそれなりのスリラー仕立てになっているのだが、話が進むにつれて私は白けてくるばかり。おまけに、さまざまな妨害をはねのけやっとう頭してきた津久井（実は身代わりの佐伯）を撃ち損じるとは一体ナニ？これはラストにおける佐伯と小島との大団円につなげるためのやむをえない設定（？）だが、角川春樹自身が書いたそこらあたりの脚本はあまりにも甘すぎるのでは？

<同じキャリアでも東大出と私大出では？>

政治主導を標榜する民主党（連立）政権のもとで、いかなる公務員制度改革が実行できるのが2010年1月18日から始まった国会の焦点の1つだが、官庁の世界では東大出の官僚とそれ以外とで明確に差別される（？）のと同じように、北海道警察本部でも東大出のキャリアと私大出のキャリアとでは明確な差別があるらしい。その象徴が東大出の生活安全部長浅野貴彦（矢島健一）と私大出の刑事部長石岡の確執だ。

他方、佐伯や小島たちのウラ「捜査」の進展はえらく順調。犯行現場に入り込んでいたコソ泥の特定、その事実上の「逮捕」、コソ泥からの自白の獲得、さらにはビデオという決定的物証の獲得。そのあまりのスムーズさには、小島ならずとも私もビックリ。そして、ビデオには何と浅野生活安全部長と“ミス道警”水村朝美とのSMプレイが撮られていたから、これによると水村朝美殺しの犯人は水村から何かと脅迫されていた浅野？そう考えるのが妥当だが、さて真実はそんなに単純なの？また東大出キャリア浅野と私大出キャリア石岡との出世競争がそこにどのように絡んでいるの？

<日本の潜入捜査はいかにもチャチ？>

「潜入捜査」が脚光を浴びたのは何といても、『インファナル・アフェア』3部作によって（『シネマルーム3』79頁、『シネマルーム5』336頁、『シネマルーム17』48頁参照）。これはハリウッドでも『ディパーテッド』（06年）としてリメイクされたほどだが、それはアメリカのボストンでは香港と同じように潜入捜査が常態化しているため？

香港やボストンのマフィアと同じように日本には山口組を頂点とするヤクザ組織があるが、日本の警官は山口組に潜入捜査しているの？また、山口組から警察内に潜入者が紛れ込んでいるの？もちろんその実態はわからないが、山口組VS大阪府警（兵庫県警）の潜入捜査合戦をテーマとした映画が存在しないところをみると、そういう実態はないのでは？それは、日本では「おとり捜査」によって集めた証拠は違法収集証拠として無効と考えられているため？

弁護士としてそんな感覚をもっている私は、本作で佐伯が告白する津久井とのコンビによる潜入捜査の涙物語はあまりピンとこない。また、北海道警の刷新を狙う（？）石岡刑事部長が、潜入捜査の失敗によってトコトン傷ついた佐伯に目をつけ、いろいろと任務を与えるというストーリーもあまりピンとこない。つまり『インファナル・アフェア』のようなダイナミックな潜入捜査の実態のない日本では、佐伯が語る潜入捜査の涙物語はいかにもチャチ？

<昨日の敵は明日の友？誰が味方で誰が敵？>

本作のストーリーをリードする主人公は佐伯と小島だが、人間的に対比して面白い人物像は東大出の浅野と私大出の石岡。また、警察という組織におけるベテランと新人との対比で面白いのがベテラン刑事の植村と新人刑事の新宮。2009年8月30日の衆議院議員総選挙で選ばれた民主党の1年生議員143名は小沢一郎幹事長のもと旧帝国陸軍初年兵のような教育漬けの日々を送っているが、何の発言もしていないのは大問題。それに比べれば、新人刑事の新宮はえらい。なぜなら、植村から「10年早いんだよ」と言われながらも、堂々と自分の疑問や意見をぶつけているのだから。政治の世界でも昨日の敵は今日の友ということはよくあるし、誰が味方で誰が敵がよくわからないものだが、それは警察内部でも同じ。『笑う警官』というタイトルはいかにも人をくった面白いイメージだが、誰が味方で誰が敵かわからない場合は、笑うしかないのかもしれない。

こんな映画を観ていると徹底的な人間不信に陥りそうだが、少なくともこれが組織の中にいる人間のホントの姿なんだということは、本作からしっかりと学べそうだ。